

平成 24 年度 第 2 回 札幌市環境教育基本方針推進委員会

議 事 概 要

1 開催日時

平成 25 年 3 月 27 日 (水) 15 時～17 時

2 開催場所

札幌エルプラザ公共 4 施設 2 階 会議室 1・2 (北区北 8 条西 3 丁目)

3 開会

事務局から出席状況の報告、委員の退任・新委員の就任の報告、配布資料の確認を行った。

【出席委員】

別紙名簿のとおり (大野委員、伊藤委員、成田委員、藤田委員、森田委員は欠席)

【配布資料】

- ・会議次第
- ・資料 1 : 委員名簿
- ・資料 2 : 環境教育関係事業について
- ・資料 3 : 札幌市環境教育基本方針推進委員会設置要綱
- ・参考資料 : かんきょう元気壁新聞平成 24 年度 冬号
- ・参考資料 : 平成 24 年度環境教育へのクリック募金寄贈教材一覧
- ・参考資料 : さっぽろこども環境コンテスト 2012 実施報告書
- ・参考資料 : 札幌市環境教育パンフレット
- ・参考資料 : エネルギー・環境に関する指導資料
- ・参考資料 : エネルギー環境教育推進事業について

4 議事 (1) 平成 24 年度環境教育関係事業の実施結果について

(2) 平成 25 年度環境教育関係事業の予定について

・資料 2 及び参考資料に基づき、札幌市環境教育基本方針における 4 つの「環境教育を進める取組の柱」ごとに、事務局から説明を行った。

<人材の育成>

- ・環境教育リーダー制度、環境保全アドバイザー制度
- ・札幌市環境プラザにおけるリーダー育成
- ・環境に関する学習活動・研究実践校
- ・エネルギーに関する環境教育の推進

<情報の共有・活用>

- ・環境プラザホームページ
- ・かんきょう元気新聞・元気通信
- ・環境教育関連施設連携事業の実施

<プログラムの作成>

- ・総合的環境副教材の修正・教師用手引書

- ・エネルギー・環境に関する指導資料
- <機会づくり・場づくり>
- ・校外学習用バス貸出
- ・環境教育へのクリック募金
- ・環境プラザにおける総合学習支援等
- ・かんきょうみらいカップ2012
- ・さっぽろこども環境コンテスト

【質疑応答・意見・感想等】

<人材の育成>

○ 環境保全アドバイザー・環境教育リーダーについて

- ・（小林会長） 先ほど、丸山委員のアドバイザー制度のアンケートが出ておりましたが、川に入って生物を観察させたりする網とかざるといった道具もお持ちなのですか
 - ・（丸山委員） 川に入ったときの指導は、私ではないほかのアドバイザーです。私も、川の依頼のときがあったときのために、網とかざるとか箱眼鏡などは教材としてある程度は持っております。ただ、実際の画像にあったのは、水生動物の調査のプロも多いので、もっとすごい道具を持っている方もいらっしゃると思います。
 - ・（小林会長） そうすると、アドバイザー制度での実習に関しては、民間に委託のような形で、費用の協力してもらっているのですか。
 - ・（事務局：布目環境教育担当係長） 講師の方には交通費程度の謝礼はお支払しておりますが、基本的には、ボランティアのように行なっていただいております。
 - ・（小林会長） 機械、器具だけでもいろいろな道具をそろえなければならないので、そういうサポーター制度があるとなおいいですね。
 - ・（事務局：布目環境教育担当係長） 「たも」などは我々でもご用意しており、環境プラザでもお貸しできますので、リーダーが派遣されるときにご利用いただけるようになっております。
 - ・（白崎委員） 学校に、環境教育リーダー、環境保全アドバイザーの一覧の冊子が届きました。これからいろいろな学校で、自分たちの学校の総合学習に適合したものと照らし合わせながら派遣をお願いすることになると思うのです。本校、新光小学校では学習内容とうまく合致せず、依頼していないのですが、前任校では、継続して川の環境教育リーダーの派遣を依頼しており、定着して学習は進んでいるのではないかと思います。
着目すべきは、件数が非常に増えていることだと思います。これだけ飛躍的に、特にリーダー制度の件数がすごく増えているのは、周知されてきたことと、定着して毎年繰り返す学校が増えているということが大きな成果として残っているのではないかと思います。
 - ・（小林会長） 頭では知っていることと、実際に自分が川に入って体験することでは大きな違いがあります。そのためのサポート施設、道具類、保険などの支えがあれば良いと思います。
- 環境に関する学習活動・研究実践校について
- ・（小林会長） このモデル校は、今年は増やすのですか。

- ・（事務局：佐野指導担当係長） 次年度もまた5校をめどに募集をかけるところですが、5校を超えて応募があった場合、どのようにするかということを検討していきたいと思っております。
- ・（小林会長） これは、ある程度予算の枠があるので何校までという制限があるのですか。
- ・（事務局：佐野指導担当係長） 研究の消費費分等として7万円程度を補助しておりまして、その予算上、ある程度の目安が必要となっております。

○エネルギーに関する環境教育の推進について

- ・（小路委員） 中学校においても小学校と同じように見えないものを扱うのは、子どもは非常に実感を伴わないために定着しにくいところで、この見える化が子どもの意欲喚起、または非常に深い理解についてプラスになっていくのだろうと思います。
この設備が1校ということですが、我々としてはもっと活用したいという意識があります。先ほど教材化に向けてという説明がありましたが、どのように教材化しようとしているのか、具体的にご説明願えますか。
- ・（事務局：布目環境教育担当係長） 教材は、紙だとなかなか実感が伴わないかと考え、現在はDVDを想定しております。それでも、百合が原小学校で行う学習とでは大きな差が出てくると思うのですが、動きを伴いながら先生の授業がサポートできるものを考えています。できれば、百合が原小学校や平岸中学校の活用を体験できるようなものにしたいと考えており、内容につきましては、学校の先生方や委員の皆様方にご意見をいただきながら、つくり上げたいと考えておりますので、ご協力いただければと思います。
- ・（小路委員） 非常に期待しております。やはりタイムリーに、できるだけ早い時期に実現してくれるとありがたいと思います。
- ・（小林会長） 体験から、さらにシミュレーションまで進めばいいですね。今、平岸中学校は何月に装置が入って運用を開始したのですか。
- ・（事務局：布目環境教育担当係長） 完成したばかりです。活用は来年度になります。
- ・（小林会長） 平成25年度は中学校と小学校のどちらですか。
- ・（事務局：布目環境教育担当係長） まだ決定しておりません。
- ・（三木委員） 百合が原で会議をさせていただき、良い設備だと思いました。学校の現場にいる者としては、いかに広げていただけるかということで、ネットを使って情報を共有するというアイデアを出されたと思っておりますので、そのあたりも広げてほしいと思っています。
私たちの学校では、太陽電池のパネルがあって発電しているのですが、そのような学校は数多くあります。どんな装置がつくのか楽しみにしていたところ、玄関でしかモニターできないのです。せっかくですから、各教室で見ることができたら、それで授業ができたのと思ったのです。小学校でも環境教育や理科教育に使えますし、いろいろな可能性があるのだけれども、子どもは、毎日同じものを見てると、やがて見なくなってしまうのです。すぐもったいないと思っています。
それを、パソコンの校内のネットワークがあるので、各教室の端末に流れるようにすれば、それを使って、今日は晴れだからこんなことが起きている、今日は曇りだからこんなことが起きている、あるいは、発電はこうだとか、特色として、固定式なので春分の日と秋分の日に最大電力が出るようにな

っているということなので、太陽の角度の問題とかいろいろなことを学べる良い機会だと思うのです。

- ・（小林会長） 先ほどご説明で、ほかの学校が見学に行く場合は、どの程度実施されているのですか。
- ・（事務局：布目環境教育担当係長） 3月にお声かけをさせていただいたばかりで、近隣の学校を中心に声かけをしてくださっていると聞いています。
- ・（小林会長） 時間のやりくりや移動手段を手配できるかどうかがネックになりますね。
- ・（事務局：布目環境教育担当係長） 校長先生からは、家庭科室は、常時使用している教室ではないので、比較的自由度はあるとはうかがっております。
- ・（小林会長） より良いものにしていくには、使った意見を聞いた上で、修正していかなければなりません。平岸中学校にヒアリングをしていただいて、より良くしていただければと思います。

○こどもエコクラブについて

- ・（小路委員） ジュニアリーダーを育てているこどもエコクラブは、これからの環境教育にとって非常に大きなことだと思います。リーダーはなかなか育たないので、エコクラブを1年体験しただけではなかなか定着していかないと思うのです。特に、20回のうち10回を経験した者がリーダーとして認定され、その次にどうするかというめどがあったら教えていただきたいと思います。
- ・（事務局：布目環境教育担当係長） エコクラブに参加してくれた子どもたちは、かなりの割合で継続的に次の年も参加してくれているようです。おもしろかったとか、興味を持ったとか、いろいろな感覚や気づきがあったとのことだと思うのですが、違うテーマで行うエコクラブに継続的に参加することで、深めていってくれるのではないかと思います。
さらに、継続するだけでなく、すそ野を広げるためには、広報も重要だと考えております。その一歩として、活動の成果を環境プラザの来館者などに、自分たちの活動を発表し、成果を発表すると自分たちのものにもなりますので、そういった工夫をいろいろしながら来年度も進めていければと思っております。
- ・（小路委員） もう一歩進めて、リーダー経験者が何か社会とのつながりを持ちながら本当の意味での環境に自分が取組んでいる、社会とのつながりあることを実感したときに初めて、そのリーダーが次のステップに踏み出せる気がします。ですから、エコクラブだけで終わるのではなく、そこで育ったリーダーであれば、次のもう一つの場を用意して、そこでの体験ができれば、またリーダーとして社会貢献その他ができていくのかなという気がしました。
- ・（小林会長） 大人になっていく過程で活動できる市民になってもらうという育て方ですね。日本全体ではそんな動きは全くないですか。札幌市でもないですか。
- ・（事務局：高木環境計画課長） 例えば、教育大学の授業の一つの単元として。こういう実習を盛り込んでいるというのは聞いたことがあります。
- ・（小林会長） 社会的なつながりとか、グレードアップしていく方法をこれから考えていただきたいですね。

<情報の共有・活用>

○こども環境コンテストについて

- ・（小林会長） 参加校は、あまり多くないようですが、どのように応募してもらっているのですか。
- ・（事務局：布目環境教育担当係長） 私達も検討が必要と思っているのですが、先生方から「敷居が高いと思っていた」というご意見をいただくことができました。出てみると、すごく楽しかったけれど、僕たちが発表して良いと思いませんでしたと言う先生がいらっしやいました。
- ・（事務局：佐野指導担当係長） 特に参加校に聞いてみますと、うちの学校では普通のことしかやっていないのではという話を多く聞きます。環境教育が学校の中で非常に広まってきて、それが一般的になってきているのかと逆に思っております。その分、特別なことをしないと強く打ち出すことが難しいと学校ではとらえてしまっているのではないかと思っております。実際に学校の発表を聞くと、同じようなことをやっても各学校で取組み方が異なり、新たなアイデアをいただけます。例えば、優秀校となった北光小学校では、学校の前の花壇に子どもたちみんなで、種を植え、苗を植え、花を育てていくという活動ですが、そこに一言「きれいに咲けるように見守ってね」など、花の気持ちを書いたり、それを花壇に掲示することで、緑化が子どもたちの手によって行われていることを強く打ち出すことができましたと思っております。そんな各学校の工夫をこのコンテストを通して広めていければと思っておりますので、ぜひ多くの学校に参加いただけるよう、教育委員会としても働きかけていきたいと思っております。
- ・（小林会長） パフォーマンスが良いところばかりを表彰したりということではなくて、日常的な普通のことでも、ユニークさとか、子どもたちの心に残るような方法で行なっているところがあります。大事なことですので、応募しやすいような敷居の低い形にして広げていきたいですね。

○かんきょう元気新聞について

- ・（高坂委員） やっと今年初めて私の息子のクラスで、教室に張ってあったのを見て、とてもうれしく思いました。ますます頑張らなければいけない、良いものをつくりたいと思えました。
冬号は、時間的に余裕がなくて、集まって話合うことができなかつたのですが、報告に終わらないで、読んだ子どもたちになるほどと思えるものを取込めたらいいなと考えました。
先ほどのさっぽろこども環境コンテストについて、私は初めてコンテストを見学して、すごくおもしろかったのです。参加してくださいというだけでなく、例えば、各学校の環境委員会の子どもたちへの招待券などのように、行きたくなるような工夫があれば、行ってみると、ああ、僕たちもやっているよねとか、こうしたらいいよねというと感じると思います。そこを見てもらうことが一番大事かと思いました。
- ・（宮森委員） 以前は、かんきょう元気壁新聞は年4回だったのですが、中学校に広げる関係で年2回になったので、間延びした感じが編集委員としてはあります。見る側としてはどうなのかと思っておりますが、学校では、2回になった影響が何かございましたらお聞かせいただければと思います。
- ・（遠藤委員） 子どもたちの身近な内容が書かれていますし、すべて教室の中に掲示しております。このかんきょう元気新聞が一番威力を発揮するのは、学習とリンクしたときです。それぞれの学校には、生活科や総合は、自分の学校でのカリキュラムがありますので、どういうふうに関連していくかということがすごく大きくなっていくと思います。掲示している段階では、読み物としての対象ですが、自分がやっている学習とつながっていくと、例えば、写真の子どもたちが同じことをやっているなど、2人称的に考えられると自分ごととして捉えられるようになると思います。それぞれの学校で、さまざまな活動をしています。先生方は当たり前だと思っているのですが、その掘り起こしとこの新聞がリンクしていくと、ますます良いものになっていくのかなと思いました。単発ではなくて、

こういうことを積み重ねていくことが大事だと思うのです。それを常設しているということがすごく良いと思いました。

<プログラムの作成>

- ・（飯田委員） 今、子どもを取り巻く環境教育は、私たちが思っている以上に、進んでしまっていると思うのです。これから子どもたちが一つの片隅に置いていただくと良いかなと思うのは、過去の日本の環境産業は、ネガティブなものを克服してきた歴史です。

ネガティブなものを学ぶということと、北海道でも環境について頑張っている民間企業はたくさんあって、その技術や現在取組んでいる中身を子どもたちに実際に見てもらったり、それを学ぶことが非常に身近なものとして、難しい内容であったとしても、小学生、中学生でも学べると思うのです。例えばメガソーラーなどもありますし、水処理や中国で問題になっているPM2.5など、克服していく民間企業はたくさんあります。そういった企業の技術や、それを見学するだけでも、技術者の言葉を聞いてもらおうと、すごく身近なものとして、また未来の大きなものとして育っていくのではないかと思います。

- ・（白崎委員） 特に民間企業との連携は大事だと思います。今年、成田委員の北海道ガス株式会社では、石狩LNGの基地の見学バスを無料で貸出してくれるということで、本校は申込みました。では、どの単元で学習をするかと考えたときに、新光小学校は5年生にしました。実際に見学に行くと、これからのエネルギーを考えるということです。

今までは、3・4年の健康なくらしとまちづくり、4年生の前期の単元でエネルギー学習がありますが、そのなかでは、水、電気、ガスの選択なのです。限られた時間の中で、各学校で、どこでどんなふうに環境教育を入れていくのか。3月の各学校のカリキュラムづくりの時期にタイムリーに、成田委員は全学校に見学ができますと案内しています。あとは、それをどう見て、先生方が意識して、どう入れようと考えていくかだと思うのです。

また、環境副教材は、札幌市が全国に誇れる内容の指導書になっていると思います。子どもたちが実体験していきながら学習していける、問題解決学習に沿った内容になっております。ただ、これを進めていくに当たっては、今度は深めていく必要があると思うのです。中身をもっと充実させていくためには、今お話ししたように、3・4年生で、地球に優しくしているということで、前回のアンケートでは9割方の先生が使いやすいと言ってくれているのですが、エネルギーの視点は入っていません。エネルギーの学習の流れなどを取込んでいくなど、見直しにかかって良いと思っております。

札幌市はエネルギーの視点が弱いと思うのです。いろいろなところで取組んで入れていくことができると思います。メタンハイドレートが、地下から噴出されているのがいよいよ取出すことができるようになった、その場所は沖ノ鳥島の近くで、5年生の社会科で国境を学習するときに、メタンハイドレートを含めて学習することができるかと、そういったところはエネルギーの視点で学習の教育過程に、いつ、何月にどんなことができるかを一覧としてつくっていくことが可能かと思っております。

また、減災、防災の視点を入れていく必要はないのか。環境では、今まで雪とか道とかまちづくりの視点は入っているけれども、今度は防災の視点を教育の方でも強く入れていくことが可能かなと思っております。

子どもはやったことしかできなくて、それに向けてどんな準備をしているか、それが学習の中でどう組み込まれていくかによって意識されていくのではないかと思います。そういったいろいろな視点、分野を今度は一元化していく取組が必要になってくると思っております。雪、環境、読書という札幌市の教育の重点はあるのだけれども、新たに防災やまちづくりの視点を入れていくと、学習も深みが増してくるのではないかと思います。

- ・（小林会長） それは、教育委員会として長期で考えていかなければならないことですね。白崎先生が言われたように、ただ見学に行くだけではなく、それをどうやってエネルギー全体の認

識につないでいくような補いを先生が講義としてやれるかどうかが大変大事だと思います。それから、先ほど飯田委員が言ってくださったことは、学校のそばにある小さな工場でも、資源の問題、エネルギーの問題、省エネの問題に取り組んでいるので、それを聞かせてもらうなど、例えば環境広場には、環境企業として、断熱材の企業とか、熱効率を上げるための企業とか、いろいろな企業努力を地元でしている会社の出展があるので、見学に行っていただくと大変勉強になると思います。

エネルギーの問題は、これから非常に重要ですし、この委員会も積極的にかかわっていくべき方向だと思っております。

<機会づくり・場づくり>

- ・（丸山委員） さっぼろこども環境コンテストについて、そもそも選考は必要かという一つのポイントがあると思います。市の担当者からは選考することの良さ、賞をとるために頑張る意識づけになるというご回答もいただいたところですが、同じように、選考は必要かということを考えられているとうかがいました。

審査の方法としましては、審査員は事前にレポートを拝見し、さらに、当日発表を聞きながら審査表に記入しているという作業をしています。4人の審査員がそれぞれの評価をたくさん記入しています。それを点数にかえて評価することになってしまうのですが、例えば皆さん熱心にここは良いとコメントを作成しているので、すべての発表校に対して評価コメントを、市で責任を持って編集していただき、すべての発表校にお渡しするとか、もしくは、選考せず「花いっぱいになって地域の人も喜んで賞」とか、漏れなくオリジナルの賞で表彰するなどの工夫ができるのではないかと思います。

幸い、今年ががんばちゃん（岩本勉さん）がコンテストに来てくれて、最後に会場とがんばちゃんがジャンケンをして、勝ち残った人に書籍をプレゼントすることをやってくださいました。これは、きっと考えてくださったと思うのです。当たる、外れるはそのときの運みたいなものだよ、今回は賞をもらえなくてもみんな頑張っただけというメッセージとして私はとらえたのですけれども、もっとよく変えていける点はたくさんあると思います。

- ・（高坂委員） 環境コンテストとか実施報告書もとても立派で良いものだと思うのですが、コンテストの発表会の報告書になっていることが残念です。各学校で、こんなふうの花に看板をつけているのだという写真や、こういう用紙でやっているのだという具体的なものがあると、ほかの学校の子どもたちが見ても使えると思うのです。これに限らず、そこに参加した子どもたちだけがわかるものではなく、参加した人ではない人にも何かが伝わるような道筋があるといいと思いました。
- ・（小林会長） 役所の記録ではなく、高坂委員が言われた中身のあるものや、丸山委員のご意見のように、さまざまな評価の内容ををフィードバックできれば、もっと有効になりますね。全体を通してご意見はございますか。
- ・（三木委員） 環境教育の基本方針を改定したときに、基本方針に沿ってカリキュラムを一生懸命つくりました。先ほど白崎委員がエネルギーの視点を入れてカリキュラムをつくるべきだという話があったのですが、実はその頃からそれを考えていて、小路委員が中学校を担当し、私は小学校を、宮森委員が家庭と職場を担当して作成しました。何年かたってしまったのですが、評価をした上で、使えなかったら作り直す、使えるのであればそれをバージョンアップするということが必要だと思うのです。ぜひ、今までつくったものにどういうふうに積上げていくかという議論にいただけたら、つくったかいもあるし、生産的ではないかと思っております。
- ・（小路委員） 三木委員と同じ意見です。
学習指導要領も改訂され、中身も我々の取巻く環境も変わってきてつあります。札幌市環境教育プログラムを、それに対応したように書きかえていかなければ現場で使えるものになっていかないので

す。本当に活用して、我々が子どもたちのために環境教育をしていくのであれば、見直しや、これについての評価がどうしても必要になってくると思います。

別件ですが、小学校としての取組は非常に充実しており、基礎をつくってくれているような気がするのです。しかし、中学校の段階ではどうかというと、中学校も、環境教育というのは必要なキープレードで、ターニングポイントになる時期だと思うのですが、そこでの取組として具体的なものがないのです。特に、環境コンテストは、中学校も参加していますが、それは一部です。中学校100校としての共通した取組をやっていかなければ、小学校でせっかく培ったものが生きてこないということが残念でなりません。

中学校は、どうしても教科ごとに分かれていきますから、統一性がなくなっていくので、だからこそ、こういう副教材で、各教育でやっている環境教育はこうやってつながっていくというものが一つあれば大きく変わっていくのではないかと感じています。小学校ではこういう副教材を配っているのだということを中学校の先生はほとんど知らないと思うのです。各学校に二、三冊でも配っていただいて、こんなことをやっているという底上げから始まって、ニーズがあれば副教材までというルートが見えてくるとありがたいという感じです。

中学校としても頑張りたいと思いますので、ぜひよろしく願いいたします。

- ・（小林会長） こういう検討を立上げる時点で、長いスパンで考えていた意気込みが生きてこなくなっているということを反省しなければなりません。もっと長期的なスパンでの見直しをどこかでしなければならぬと思います。
- ・（宮森委員） 札幌市環境教育プログラムについて、全部を見直すという作業だと一つ一つ時間がかかり大変かもしれませんが、震災以降、エネルギーや環境教育も変わってきていますし、先ほど三木委員がおっしゃったように、これをつくったときには、今は小学校や中学校の屋根の上に太陽光発電は余りなかったと思います。それからは劇的にふえております。それを学校の屋根の上に載せた意味は、教育的な意味が大きくて、あそこで発電しようとは思っているわけではないです。メガソーラーでも何でもなくて、教育的な意味ということで立てたと思いますので、それをどういうふうにして利用していくかをこういうプログラムの中に新しく組み込んでいくことで、皆さんが利用していただけるきっかけになるとと思いますので、ぜひ、そこから始めていただきたいと思います。
- ・（飯田委員） 環境教育は、先ほど小学校は非常に充実しているけれども、中学校に連続性が難しいというお話もありましたけれども、おそらく中学校なり高校、ひいては、私たち大人まで続くくるということです。ドイツの環境教育は、小さいころから連続性を持ってやられてきております。ですから、子どもに限らず、そういう連続性がすごく大事なのだと思うのです。環境ということに関しては、そういう連続性が最も大事でありますし、とにかく、時代は変わったというか、数年前につくったものがまた更新されていかなければならぬというフェーズに入っていると思うのです。そういう意味でも、大げさに言うと、これからの子どもたちに我々の未来を託さなければならぬというフェーズに入っていると思うのです。克服してきた歴史がありますので、それをさらにバージョンアップしてつくっていくという子どもたちになっていったらいいと思います。日本には、すごい技術力がありますので、そういったものを伝え、なおかつ、どんどん発展させていく教育にしていっていただければと思います。学校の中ではおさまらないと思っております。
- ・（小林会長） 多角的に物を見る目、定量的に考える、歴史的なスパンの中で考えると、いろいろなことが環境教育の基礎だと思います。
- ・（丸山委員） 残り時間で申し上げます。最後に、いい感じになってきたので重ねるように申し上げますが、今日は質問と意見を言いたいと思って参りました。

まず、大きな話としては意見です。この推進委員会についての意見です。進捗状況がうまく反映されていないというご意見も出ましたけれども、この推進委員会の設置要綱が資料3で配られておりますが、第1条に施策の進捗状況や評価、検証するために設置するとなっております。ですから、行われた施策を評価、検証することが主になることはわかります。行われたものをご報告いただき、それについて意見を言うというような方法で進めることが主になると思いますが、評価、検証は次に行うもののためにあるととらえるのであれば、この会議は、報告にとどまるのではなく、むしろ、次の施策により反映しやすいタイミングでこの意見をもらっていくときに開催してほしいと思っています。

もう一つは、先ほど環境教育プログラムの見直しが必要な時期ではないかというご意見があったのですが、札幌市環境教育基本方針自体の見直しはいかが考えられているのかをお聞きしたいと思っておりました。環境教育の進める取組を進める柱として、この4本に従ってご報告をいただいております。ご報告はいただいているのですが、例えば、この4本の柱のどれがどれぐらいいい感じに進んでいて、どれがなかなか進んでいないのかということがわかれば、その手だてをするべきだと思いますし、重点化する三つの行動がその上にありますが、省エネとごみ、リサイクル、水と緑を守り育てるの三つの重点化行動のどれがどのようになっているのかを私たちは考えていくべきだと思います。さらには、重点化する対象は、手始めとして子ども（学校）を対象としてやっていますが、現時点でもこの書き方でいいのかどうかと思っています。と申しますのは、現在、札幌市では、市の長期計画の策定がほぼ決定していて、その中で環境首都・札幌をもっとしっかり確実に進めようということが決まります。さらに、市長政策室の中に環境のポジションをつくって環境首都・札幌を進めることが決まりましたので、子どもを対象にするのはもちろんですけれども、プラス生涯学習が必要と先ほど飯田委員がおっしゃったように、ずっと継続するもので、小学校から中学校につなげていくことが必要で、民間企業の取組とウィンウィンになるような環境学習にもっとチャレンジする必要があります。というのは、そもそも環境プラザの目標の中に、子どもと企業と手を組むということで、対象者として子どももしっかりやる、企業とも手を組んでいく。道の環境サポートセンターが同時ぐらいにできたので、向こうが市民活動団体、NPOなどと重点的に手を組むという一応の役割分担があって、それはだんだん薄れてきたのですが、企業と手を組むというのが環境プラザの当初の役割だったはずで、それを、今、どうやっていくのか。もっと拍車をかけてやっていくべきではないかと思っております。あと三つ質問があったのですが、時間がないので、やめます。

- ・（小林会長） 今、丸山委員が言ってくださったような本質問題は常に見直してつくっていかねばなりません。基本問題ということでスタートしたけれども、そのまま惰性で来て、いつの間にか形式化してきたりしています。それは、技術情勢、社会情勢、国際情勢が変わっていく中なので、リフレッシュしていかねばなりません。その意味で、今の基本問題のさらに本質的な議論をする場というか、それは、教育委員会と環境局で練っていただけますか。今、丸山委員が提起されたようなことはしていかなければいけないと思います。

今日の議題は、本当はもっと時間をかけて議論しなければいけませんね。盛りだくさん過ぎますね。皆さんが発言を控えないと時間に終わらないので、もっと回数をするか、中身を減らすか、重点を絞りながら、時間をかけて議論をしなければ環境問題は共通認識にも行動にもつながらないと思います。

5 閉会

（事務局から閉会の挨拶）

－ 以 上 －